

平成 29 年 6 月 17 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23530152

研究課題名(和文) 16世紀スペインにおける恩寵と自由意志 「もう一つの社会契約説」の展開

研究課題名(英文) Divine Grace and Human Free Will in Sixteenth-Century Spain: A Variety of the Early-Modern Political Thought

研究代表者

松森 奈津子 (MATSUMORI, NATSUKO)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：80337873

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、16世紀スペインにおける後期サラマンカ学派が政治的諸問題を論じる際の基盤にしていた、神の恩寵と人間の自由意志の関係をめぐる諸議論を検討したものである。このことにより、イエズス会士を中心とする彼らが、社会契約説に代表される同時代の主流理論とは別の形で、初期近代政治思想の一潮流を形成したことを明らかにした。それは、初期近代が内包していた脱中世型政治体探求の豊かなヴァリエーションの一端として、注目される。

研究成果の概要(英文)：This study examined the discussions on the relationship between divine grace and human free will in sixteenth-century Spain, focusing on the Later Salamancans, who had discussed various political issues on the basis of their understandings of that relationship. Through this investigation, it was clarified that the Later Salamancans--most of them were Jesuits--had developed a different intellectual stream from the contemporary mainstream theories, especially the social contract theory. Such Salamancan attempts are worth reconsideration as an important variety of the early-modern political thought.

研究分野：政治思想史、地域研究(スペイン)、国際関係論

キーワード：サラマンカ学派 恩寵 自由意志 抵抗権 ビトリア スアレス モリナ マリアナ

1. 研究開始当初の背景

近代の政治秩序は、西欧的主権国家体制の確立とその対外侵出という二つの側面から形成されたが、従来の政治学研究では、国家理性論や社会契約説の分析を中心に前者が注目されてきた。しかしその特質を理解するには、マキアヴェッリからホブズに至る国内統合/ヨーロッパ諸国家間関係樹立の論理だけでなく、インディアス問題を通じて生成した「世界」秩序創出の論理をも解明する必要がある。このような見解に基づき、応募者はまず、近代の形成を異文化間秩序の面から考察し、「野蛮な非ヨーロッパ」と「文明としてのヨーロッパ」を対置する近代的な二分法が、鋭い批判を伴って16世紀前半期スペインに芽生えたことを論証した(1995~2004年度)。

この過程で、当時のスペインで圧倒的な影響力をもっていたサラマンカ学派の政治理論が、対外征服のみならず、主権国家体制の分析としても、豊かな内容を有していることが分かった。そこで続く研究テーマを、前期サラマンカ学派(c.1526-c.1576:ピトリアからマンシオ)が形作ったカトリック世界の近代的権力・国家論の分析とした(2005~2007年度)。つづいて、ここで生成した、正義と善の実現を重視する国家論が、後期サラマンカ学派(c.1576-c.1615:メディナからスアレス)に、どのように受け継がれたのかを検討した(2008~2010年度)。

こうした成果をふまえ、本研究は、後期サラマンカ学派の権力・国家論の分析をさらに発展させる試みであった。同学派の理論展開と相関関係を考察する過程で浮かびあがってきたのは、その権力・国家論の中核が、恩寵論争や忠誠宣誓論争に代表される、恩寵と自由意志の関係をめぐる諸議論だったということである。ここから、次の課題は、この二つの論争を中心に16世紀後半期スペイン(c.1560-c.1620)の政治理論を検討し、初期近代ヨーロッパにおけるその地位と意義を確定することにあるという視座を固めるに至った。

2. 研究の目的

本研究には、主として二つの目的があった。第一に、恩寵論争と忠誠宣誓論争を主軸として展開された16世紀後半期スペインの世俗権力論の全体像を明らかにすること、第二に、社会契約説に代表される同時代の主流理論との異同を考察することにより、その地位と意義を模索することである。

3. 研究の方法

これらの目的を達成するため、テキストの内在的分析に重点をおきながら、中世から近代に至る国家論の変遷をめぐる通時的分析をも試みた。

内在的分析としては、まず、人間の意志は無条件に神の意志に服するか否かをめぐ

て、モンテマヨル、モリナ、パニェスを中心に生じた恩寵論争、ついで、王権を神から直接授けられたものとみなすジェームズ世の王権神授説に対して、スアレスやベラルミーノが反駁を加えた忠誠宣誓論争が、主な考察課題であった。

通時的分析としては、16世紀後半期スペインの思想を、近代国家論の形成という文脈に位置づけることにより、その独自性と意義を問うことが課題であった。

4. 研究成果

本研究は、申請当初の計画では、恩寵論争をめぐる資料調査・解釈(2011年度)・草稿執筆(2012年度)・忠誠宣誓論争をめぐる資料調査・解釈(2013年度)・草稿執筆(2014年度)・最終成果発表(2015年度)の三期に分けて進められる予定であった。しかし、初年度から一貫して、研究が当初の計画以上に進展した。このため、さらに研究を一步進めるべく、補助期間を一年延長し、より広い文脈に位置づけてこの研究課題の意義を問う成果を準備することになった。したがって、本研究課題は6年間に延長された。それぞれの年度の具体的な成果は、以下である。

(1) 2011年度

まず、第一の分析軸となる恩寵論争をめぐる資料調査を通じて、典拠となる底本の確定作業を行った。具体的には、貴重図書購入、図書館閲覧・相互貸借によって、研究書の附録、雑誌論文、当時の初版、手稿本の形で散在しているラテン語・カスティリヤ語原典を収集した。

ついで、これらのテキストを読み込むとともに、先行研究の批判的検討や諸研究者との議論によって、恩寵論争をめぐる思想家間の異同を確定し、理論展開の過程を把握した。具体的には、後期サラマンカ学派が多大な影響を受けている前期サラマンカ学派との異同を明確にするため、16世紀前半期を考察対象とした既刊の拙著をめぐる合評会の場において、隣接分野の諸研究者と議論を深めるとともに、あらためてその理論的特質を英語の二論文としてまとめた。また、16世紀後半期の理論展開についても、二つの口頭報告、一冊の分単著の形で公にした。

以上により、本邦ではほとんど知られていない後期サラマンカ学派の原典、先行研究を紹介し、古来の恩寵論争の文脈に位置づけてその特質を明らかにすることができた。

(2) 2012年度

ひきつづき、第一の分析軸となる恩寵論争をめぐる諸議論を考察した。すでに前年度において、底本と先行研究を調査・確定し、宗教的側面からの恩寵論争の経緯と理論展開の詳細を明らかにしたので、これらに基づき、そこにあらわれた諸議論の政治思想面での意義を模索した。

具体的には、後期サラマンカ学派が多大な影響を受けている前期サラマンカ学派との異同を明確にするため、あらためてビトリアに代表される16世紀前半期の理論的特質を英語の二論文、邦語の一論文としてまとめた。また、16世紀後半期の理論展開について、四つの口頭報告、一冊の分担報告書の形で公にした。

以上により、とりわけ人民による統治者の抵抗権と、「野蛮人」の政治権力という観点から、恩寵と自由意志の問題が、神学者たちの議論に端を発しながらも、結果的には、それ以降の権力・国家論を律する論理を提供するに至った点が明らかになった。

(3) 2013年度

第二の分析軸となる忠誠宣誓論争に関連する諸議論を考察した。まず、後期サラマンカ学派を中心とする思想家たちのテキストの底本と先行研究を調査・確定し、その読解と解釈に努めた。ついで、抵抗と服従をめぐる思想系譜に位置づけながら、彼らの理論的特質と意義を検討した。

具体的には、後期サラマンカ学派が多大な影響を受けている前期サラマンカ学派との異同を明確にするため、あらためてビトリアに代表される16世紀前半期の理論的特質を英語の二論文としてまとめた。また、これを批判的に継承した16世紀後半期の理論展開について、口頭報告一編、共著論文二編の形で公にした。以上により、モリナとスアレスを中心とする後期サラマンカ学派イエズス会派の権力論、国家論の特質が明らかにされ、彼らがマリアナやベラルミーノといった周辺のイエズス会士とともに、ジェームズ一世をはじめとする王権神授説にどのように対抗したか、またそれが啓蒙期を中心とする後世にどのように受け継がれたか、が検討された。

(4) 2014年度

ひきつづき、第二の分析軸(忠誠宣誓論争)に関連する諸議論を敷衍し、サラマンカ学派の秩序構想を、国際法秩序形成の系譜というより広い視野に位置づけて再検討した。

具体的には、後期サラマンカ学派の基盤となっていた前期サラマンカ学派との異同を明確にするため、16世紀前半期の理論的特質を英語の二論文としてまとめた。また、これを批判的に継承した16世紀後半期の理論展開について、スアレスやモリナに注目しながら、口頭報告一編、共著論文一編の形で公にした。以上により、前後期サラマンカ学派の世界観、万民法概念の特質が詳細に検討され、中世から近代にかけての重要な転換点を準備したその独自の意義が明らかにされた。

(5) 2015年度

前年度までの作業を総括し、その成果を公にした。第一に、後期サラマンカ学派が拠っ

て立つ前期サラマンカ学派に関する二編の英語学術論文を公刊した。第二に、これまでの研究成果論文について、ハーバード大学、ラーマ大学、ナバラ大学の諸研究者からコメントを得る機会をもち、これらをもとに今後の研究方針を決定した。

5年間の研究期間中に、交付申請書の計画以上に研究が進展し、当初予定していた研究成果を公にすることができた。このため、さらに研究を一步進め、補助期間を一年延長し、初期近代世辞体制の成立というより広い文脈における前・後期サラマンカ学派の政治理論の意義を問う英語単著執筆のための資料収集、英文校閲を行うこととした。

(6) 2016年度

昨年度にひきつづき、一昨年度までの作業を総括し、その成果を公にした。第一に、後期サラマンカ学派の理論と比較考察するために、前期サラマンカ学派に関する二編の英語学術論文を公刊した。第二に、本研究課題をこれまでの研究課題と連動させ、英語単著としてまとめるべく、草稿を書き進めた。現在、イギリスの出版社と契約を結び、匿名の三名の査読者の審査結果をふまえ、加筆修正中である。

今後は、昨年度から着手した研究課題とも連動させながら研究・執筆を進め、最終的には単著原稿としてこれまでの成果をまとめ、出版する予定である。査読者からも、このテーマでの単著は世界的にも珍しく、出版がかなったならば最先端の研究書になるだろうとの評価を得ており、有意な学術的貢献ができるものと見込まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13件)

Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (IX)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 15 (2), pp. 17-31, 2017, 査読無.

Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (VIII)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 15 (1), pp. 165-175, 2016, 査読無.

Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (VII)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 14 (2), pp. 62-72,

2016, 査読無.
Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (VI)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 14 (1), pp. 1-11, 2015, 査読無.
Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (V)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 13 (2), pp. 39-54, 2015, 査読無.
Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (IV)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 13 (1), pp. 83-96, 2014, 査読無.
Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (III)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 12 (2), pp. 149-159, 2014, 査読無.
Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (II)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 12 (1), pp. 119-128, 2013, 査読無.
Natsuko Matsumori, "Reason and Prudence: A Study of the Discussions on the Nature of 'Indians' in Sixteenth-Century Spain (I)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 11 (2), pp. 41-56, 2013, 査読無.
Natsuko Matsumori, "The Modern Political Order and the Affairs of the Indies (2)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 11 (1), pp. 85-107, 2012, 査読無.
松森奈津子『『グローバル化』時代の秩序と正義 インディアス問題にみる他者認識』、*Revista de Estudios Hispánicos de Kioto*, 別冊2、2012年、1 - 10 頁、査読無(依頼執筆).
Natsuko Matsumori, "The Modern Political Order and the Affairs of the Indies (1)," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 10 (2), pp. 93-111, 2012, 査読無.
Natsuko Matsumori, "The School of Salamanca in the Affair of the Indies:

Toward an Alternative Theory of the Modern State," *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 10 (1), pp. 27-48, 2011, 査読無.

〔学会発表〕(計 9 件)

松森奈津子『『野蛮人』との秩序の共有 サラマンカ学派とその周辺』、政治思想研究、2014年6月5日、於慶應義塾大学(招待講演).
松森奈津子「スペイン啓蒙とその前史 サラマンカ学派イエズス会派を中心に」、東北大学政治学研究会、2013年11月15日、於東北大学(招待講演).
松森奈津子『『野蛮人』との共存 16、7世紀スペインにみる「もう一つの国家論』、北海道大学政治研究会、2012年11月15日、於北海道大学(招待講演).
松森奈津子『『野蛮人』と政治権力前・後期サラマンカ学派における国家と抵抗の論理』、第37回社会思想史学会大会、2012年10月28日、於一橋大学.
松森奈津子「多文化共生と他者理解 宗教の別を超えて」、2011USフォーラム、2012年9月25日、於静岡県立大学.
松森奈津子「後期サラマンカ学派における秩序と抵抗 マリアナ、モリナ、スアレス』、「野蛮と啓蒙」第5回研究会、2012年7月14日、於京都大学.
松森奈津子「秩序、抵抗、革命 16世紀スペインにみる抵抗権の生成と展開』、サントリー文化財団研究会「21世紀の国際システム』、2011年12月19日、於サントリー文化財団(招待講演).
松森奈津子「近代スペイン国家形成と後期サラマンカ学派 モリナの権力論を中心に』、国立民族学博物館機関研究プロジェクト「近代ヒスパニック世界における共同体の構築』、2011年10月29日、於国立民族学博物館(招待講演).
松森奈津子『野蛮から秩序へ インディアス問題とサラマンカ学派』合評会、関西大学マイノリティ研究センター第8回研究会、2011年7月2日、於関西大学.

〔図書〕(計 5 件)

松森奈津子、晃洋書房「国際法」(押村高編『政治概念の歴史的展開』第7巻所収)、2015年、63 - 85 頁(依頼執筆).
松森奈津子、岩波書店「サラマンカ学派『野蛮人』と政治権力」(川出良枝編『岩波講座政治哲学』第1巻所収)、2014年、51 - 71 頁(依頼執筆).
松森奈津子、京都大学学術出版会「バロック期スペインから啓蒙へ 服従と抵抗」(田中秀夫編『野蛮と啓蒙 経済思想史からの接近』所収)、2014年、17 - 45 頁.
松森奈津子、関西大学マイノリティ研究

センター「近代スペイン国家形成と後期サラマンカ学派　ルイス・デ・モリナの権力論を中心に」(孝忠延夫ほか編『多元的世界における「他者」』所収)、2013年、239 - 260 頁。

松森奈津子、関西大学出版部「16世紀スペインにおける恩寵と自由意志　前モリナ主義からモリナ主義へ」(孝忠延夫ほか編『差異と共同　「マイノリティ」という視角』所収)、2011年、221 - 241 頁。

6．研究組織

(1)研究代表者

松森 奈津子 (MATSUMORI NATSUKO)
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：80337873